



もし落丁、乱丁その他不良品がありましたら、おとりかえ
します。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

10冊の本 1

青春の日々に

定価 五五〇円

昭和四十三年九月五日 発行

編者 井上靖
臼井吉見

発行者 石川数雄

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一の六
郵便番号一〇一

振替 東京一八〇番
電話 東京(294)一一二(大代表)

10冊の本
I

青春の日々に

青春の日々に／目次

私の青春

私の自己形成史

井上靖 7

私には家庭なかった

水上勉 59

わたしの有情論

有吉佐和子 71

十八歳と三十四歳の肖像画

三島由紀夫 105

青春

伊藤整 119

高校時代

湯川秀樹 129

若き心のさすらい

田宮虎彦 149

ニヒリスムの容器

埴谷雄高 185

いつもがはじまり

谷内六郎 207

青春を考える

青春の五つの課題

亀井勝一郎 215

思春期の娘たち―外側と内側―

佐多 稲子 235

青春の危機感―性について―

野間 宏 257

青春期の勉強と仕事

武者小路実篤 271

後世への最大遺物

内村 鑑三 295

私の個人主義

夏目 漱石 349

〔詩〕生ひ立ちの歌／中原中也 6 二月／村山槐多 58 小景異情／

室生犀星 118 愛は終了され／萩原恭次郎 206 ふるさとの／三木露

風 294

〔短歌〕一握の砂（抄） 石川啄木 233

〔グラフ〕読書の女／ファンタン・ラトゥール 1 「海の幸」／青
木繁 147 「パンセ」／オーギュスト・ロダン 213 （解説）嘉間安雄

解説

若い人々に呼びかける言葉

石坂洋次郎 385

生ひ立ちの歌／中原中也なかはらちゅうや

幼年時

私の上に降る雪は
真綿まわたのやうでありました

少年時

私の上に降る雪は
霰みぞれのやうでありました

十七—十九

私の上に降る雪は
霰みぞれのやうに散りました

二十一—二十二

私の上に降る雪は
雹ひょうであるかと思はれた

二十三

私の上に降る雪は
ひどい吹雪ふぶきとみえました

二十四

私の上に降る雪は
いとしめやかにになりました……



中原中也〔明治四十〇昭和十二年（一九〇七—三七）〕詩人。山口県湯田町に生まれた。十五歳で友人との共著歌集「十五歳末黒野」を發刊。昭和八年東京外語専修科を卒業。フランス象徴派の詩人ランボーやヴェルレーヌに傾倒。「生ひ立ちの歌」は昭和九年刊の詩集「山羊の歌」に収録。ここにはその「1」を抄録した。

私の自己形成史

井上 靖
いのうえ やすし



井上 靖〔明治四十年（一九〇七）〜〕小説家、日本芸術院会員。北海道旭川生まれ。金沢の四高、九大法文学部を経て、京大哲学科卒業。『サンデー毎日』の懸賞小説に応募した「流転」で千葉亀雄賞を受けた。昭和十一年に毎日新聞社大阪本社に入社、学芸部、社会部に勤務、二十三年書籍部副部長として東京本社へ転勤。その間に「闘牛」「狼銃」を得て出世作となった。二十六年五月に新聞社を退社し、文筆に専念の生活にはいった。

旺盛な筆力による小説、詩はおびただしい数にのぼり、「狼銃」「闘牛」「化石」等に彫りの深い文章で描き出された虚無と孤独、「天平の甕」「風濤」や、「敦煌」「楼蘭」など一連の歴史小説にあらわれた極限にいとむ人間のすがたは、ともに井上文学の特色となっている。

「私の自己形成史」は三十五年に『日本』五月十一月号に連載された自伝。幼少年期のことは、「グロウドル氏の手袋」「あすなる物語」「しろばんば」等の作品に取り扱われている。

父と母とのたたかい

私は去年の五月、父をうしなつた。父は八十一歳の高齢で他界したので、まあ天寿を全うしたといつていいようである。父の計を東京の家で曉方受け取ったときも、それから通夜の晩も、私はそれほど大きいショックは受けなかった。父が半年近く病床にあって、遅かれ早かれ、こうした日はくるものと覚悟していたので、私としては心準備ができていたわけである。

併し、父がなくなつて八カ月を経た今ごろになつて、かえつて私は強く父のことを思い出し、父の死について考えたりすることが多い。父が生きていてくれたらと思うことかしばしはある。そして父という人が、私という人間にとつて浅からぬ縁を持つた人間だと、痛切に思い知らされることがある。——今宵こそ思ひ知らるれ浅からぬ君にちぎりのある身なりけり——この歌は西行の歌で、西行が自分と関係深かった鳥羽院の死を悼んでうたった歌であり、子供と父との関係を語るとき引き合いに出すにはふさわしくないとと思うが、しかし私にはみようにこの西行の歌が思い出されてくるのである。それはともかくとして、父が他界した夜にこそ、思い知るべきであつたことが、そのときはそれほど感じられず、私には八カ月先になつてやってきたのである。

しかし、私ばかりでなく、すべての人の場合、同じではないかと思う。これが父でなく友人とか知人とかであつたりした場合、その死を知ったとき、それと同時に悲しみはやってきて、

その悲しみは歲月とともに薄れてゆくものなのであろう。ところが父の場合は反対で、死の当座はそれほどでなく、それから遠ざかるに従って、しだいに悲しみは深くなり、思いがけないとき、ふいにそれは襲いきたって、野分が満目の山野の木々を二つに割るように子供の心を二つに割るもののようにである。

世の子供たちか多かれ少なかれそうであるように、私もまた、自分の父親に対して苛酷きわまりない批判者であった。私は常に父親に完全なものを求めていた。私ばかりでなく、すべての子供にとって父親というものは常に完全でなければならぬもので、ここに子供と父親の悲劇の根源はあるようである。

私は少年時代から四十歳くらいまで、絶えず父親に批判の眼を向けていた。よきにつけ、悪しきにつけ、厳正きわまりない批判者であった。口には出さなかったが、いつも心の中では父親のすること為すことに冷たい眼を向けており、父親の性質にさえも常にあきたらぬものを感じていた。私にとっては父親は完全でなければならなかったが、考えてみれば神以外に完全な人間などというものがあるはずはない。そうしたことはよくわかっていながら、しかし、なお私は父親に完全なものを求めていたのである。

子供が父親に対してこうした気持ちを持つことは、本能的に自分が父親によって決定されていることを知っているからである。血の反発というような言葉があるが、自分か父親のすへて

1 西行が徳大寺家に仕えていたころ、主家の令嬢が待賢門院として鳥羽院の中宮になった。その関係で鳥羽院とは親しく、その死は西行にとって悲しみにたえなかった。

のものを受け継いでおり、所詮父親の持っているものから、自分というものが脱出できないことを知っているからである。

少年期から私は、自分が父親と同じような感じ方をしていることに不満であり不服であった。そしてそれが四十歳ぐらいまで続き、四十歳を過ぎてから初めて老いた父親を、たとえ反発は感じながらも、しだいに素直に抱き取ることができるようになった。

へんな言い方であるが、私が父親からもらった一番大きいものは、父親の持っているものを受け継いだことではなく、父親に反発することによって、自分を父親とは少し違ったものに造りあげようとしてきたその過程であるといっている。四十歳を過ぎて父親に対する考え方がちかってきたというのは、おそらく自分が一方で父親の持っているものをそのまま受け継ぎながら、他方で父親の持つものとは全く別個なものを身につけ始めたからなのであろう。

母親に対する場合も、父に対する場合と同じであると思う。ただ子供は母親を母親であるということがある程度許すことができる。同じように血の反発は感じながらも、多少子供の持つ母親に対する批判は、父親に対する場合と比べて、その意地悪さを弱めている。そうした違いはあるが、しかし、根本において完全なものを求めることは、母親においても同様といわなければなるまい。

いま考えてみると、私という人間は要するに、父親と母親という二人の人間の持つ、あらゆる長所も短所もそのまま受け継ぎながら、父親と母親のいずれにも似ない自分を造りあげようと努力してきたのである。子供というものは何という悲しい努力をするものであろう。私の子

供はまた私が為したと同じようなことを、私に對して為すであろうと思う。

父の死後、八カ月を経て、父の死を悲しむ心を私が持ったということは、私が批判すべき、相手を失ってしまったことを自分ではっきり認識したことを意味する。私は最早この世において、自分と同じような考え方をする人間も、同じような感じ方をする人間も持っていないのである。そしてそうしたことからはじめて、私はときとき激しい孤独を感じるのである。なにかにつけて、もし父親が生きていたら、父親だけは自分の気持ちかわかってくれたであろうと思うのである。一生反発してきた父親が、こんとは自分のこの地球上におけるただ一人の理解者であつたということに氣付き始めるのである。

私は父をうしなつたが、現在し十六歳の母親を持っている。もし母親をうしなえば、父親の死によつて存続したとまったく同じものを、私は母親に對してもまた経験することであろうと思う。

以上書いたことは、多少読者のひんしゆくを賣うかも知れない。そんな冷酷な親子の關係があるものかと思う読者もあるかもしれない。しかし、私は親子というものは例外なく本質的にこういうものであり、人によつて強弱の差はあれ、なべてこうした業のようなものに操られてゐるものであると信じてゐる。

私は父にも母にも似ない自分を造りあげることに努力してきたといつたが、私の場合、幼少時代から両親のもとを離れて祖母の手で育てられ、長じて中学、高校、大学と進むにおよんで、その間両親と一緒に生活したのはほんの僅かの間だったので、ずっと一緒に生活をしている人

たちより、いくらかそうした自己形成の過程が、自分でも意識できるような形において立ち現われて来たかもしれない。つまり意識的にそうした努力を自分に課することが、他の人の場合よりいくらかはつきりした形で行なわれたかもしれない。

父は麻雀でも、碁でも、将棋でも、撞球でも、勝負事はなんでもひととおりやってのけた。私はそうした父親が嫌いだ、おかげで私は現在、麻雀も、将棋も、碁も、撞球なものにも知らない。父親は軍医だったので、文学というものには全く無関心だった。私が文学に心惹かれたのも、父親がそのことに無関心だったためかもしれない。もし父親が文学書でも繙いていたら、私はそうした父親を軽蔑して私自身はもっと実利的なものの方に心惹かれていたことであろうと思う。

私の家は伊豆の山の中で代々医家だったので、当然のこととして両親は私を大学の医学部に進ませようとした。しかし、私はこの世で医者だけにはなるまいと、固く心に決めていたのである。そして父親が最も軽蔑していた大学の哲学科(美学)などへはいるといった結果になってしまった。といって、私は私の人生航路のすべてを、父親に対する反発心によって説明しようとは思わない。

私は父から気の弱さや八方美人的な性格をそっくりそのまま貰わざるを得なかったし、母からはかなり強烈なエゴイズム(自分本位な気持ち)と物に感じ易い涙もろさを、同様に貰わざるを得なかった。ことに母の性格には強い反発を感じながらも、結局は一番強く母を母たらしめているエゴイズムと感じ易い性格を、そっくりそのまま私は受け継いでしまったようである。

従って、より正確にいうならば、私という人間は父から受けた気の弱さと八方美人的な性格と、母から受け継いだエゴイズムと物に感じ易い神経とを併せ持っており、そして、人生に對する向かい方においては両親とはまったく反対の方向に自分を捻じ曲げてしまったのである。

私は父の亡^ない現在、自分か父と母との間にできた子供以外の何ものでもないものとして自分を感ずるとともに、およそ両親とは似ても似つかぬ自分を自分のうちに発見するのである。

私は学生時代からかなりの浪費癖があり、それはずっと現在まで続いているか、これは父の性格にも母の性格にも発見できないものである。それから一か八かやってみようという射倖^{しやうしん}心もまた、両親のいずれもが持ちあわせていないものである。私は物事に諦^{あきら}めがよく、かなり大きな失敗にもさして神経をつかわぬ樂天的なところがあるが、これもまた両親とはまったくちがうところである。

ここまで書いてきて、私は自分と両親との關係が少しも書けないことを感ずる。一番大切なことに少しも触れていないもどかしさを感じる。

私が、この章で、一番沢山の分量をさいて語らなければならぬものは、おそらくただ一つのことであろう。しかし、それを書くことはきわめて困難なことのようなのだ。

私の父は五十歳にならずして陸軍を退官すると、すぐ郷里の伊豆の山の中に引っ込み、それから昨年没するまで三十年間、ほとんど家から出ることなく生活してきた、そうした人間である。どうにか食べるだけの恩給は貰^{もら}うからいいようなものだが、父という人間には名利への欲望というものはまったくなかった。いい生活をしようとするでもなく、公職に就^つこうというの

でもなかった。人間嫌いというか、医者でありながらついに郷里へはいってから一人の病人の脈もとったことがなかった。

母はまた母で、そうした父親と歩調をあわせて、父のいうままに四十歳早々から田舎に埋もれてしまった。母にもまた、自分を社会の表面に押し出し、より楽しい生活を持つとうという欲望はまったくなかったのである。

私はこうした父と母の持っているものに対して、一番強く反抗してきて、そうした両親の生き方とは対蹠的な自分の名前を活字にするような生活を持つようになったが、しかし、私は自分の作品の中に、父と母とが常に顔を出していることを時に人から指摘されることがある。

私は父と母との退嬰的な生き方を敵として、ずっとそれと闘ってきたはずであった。それでいて作品の中に常にいろいろな形で、父と母とが顔を出しているということは、一体どういうことであろうか。

私は最近よく思うことがある。父と母とに反抗して私は自分にまったく両親とは別の生き方を強いてきたが、それでいて、もししたら両親の生き方に最も強く同感し、それを理解していたのは自分ではなかったらうか、と。こうした考え方にぶつかった時ほど、私は慚然とした思いに曝されることはない。

ともあれ、父は昨年他界し、父の他界とともに、私と父との長く続いた劇は終わってしまった。私か父から何を貰い、いかなる影響を受けたかということは、これから何年かのうちに自然にはつきりしてくると思う。私が父から、そして母から貰った私の生涯を決定

した一番大きいものは、私自身がまだ気付いていないものであるかもしれない。

私は顔の上半分を父から貰い、顔の下半分を母から貰っている。父の顔全部を貰っていたら、私の顔はもっと温厚であつたはずである。また母の顔をそっくり受け継いでいたら、もっと明るい邪気のないものであつたはずである。私は両親の顔半分ずつあわせ貰って、奇妙な顔を自分のものとしなければならなかつた。歩き方は父のものであり、喋る声は母のものである。私は自分の歩き方にも、自分の声にも満足していない。近年はそうでもないか、二十代、三十代のころまでは厭でたまらなかつた。

このあいだ私は親戚の者から、じゃれついてくる犬を向こうへ押し遣つた手つきか、父親そっくりだと指摘されてはつとしたことがあつた。そしてその時、この分では、今後何が似てくるかわかつたものではないといった思いに打たれた。

祖母のこと

人間は誰でも、両親以外に自分に決定的な影響を与えた何人かの人を持つものである。その人にもし会わなかつたら、おそらく自分の生涯は、よかれ悪しかれ変わったものであつたらうというような、そうした人々を何人かは持つものである。そして実際そうした人々によって、一人の人間の人生に対する考え方や対い方^{かた}というものは決められてゆくものなのであろう。

私はこの前の章で、父と母のことを語る時ちょっと触れておいたが、私は幼少時代祖母に育